子規の旅

―「はて知らずの記」を中心として

文学科　黒沢　勉

目次

一　子規の紀行文の大要
二　「はて知らずの記」の概略
三　旅立の心
四　岩手の旅
五　旅と病い
(1)「水戸紀行」と「四日大盡」
(2)「はて知らずの記」における病い

一　子規の紀行文の大要

病弱な子規は、その病弱な身体をおしてしばしば旅をした。その旅は紀行文を書くという文学的な営みと直結していた。旅が目的なのか、紀行文を書くのが目的なのか、と問われれば、子規はおそらく返答に窮したであろう。書かれざる旅は子規にとって無意味であり、旅をするということは、そのまま「文学する」—自然や風土、人情に接して感銘をあらたにし、それを漢詩や短歌、俳句、紀行文としてまとめることに他ならなかった。そもそも子規が旅に志したのは、旅を通して発見した自然の風光に接した感動を詠んだ詩文に接してからのことであるから、旅をしながら「文学する」ことは当然のことでもあった。

子規の旅は、故郷の松山にいた時、友人達と岩屋、久万山に行ったり大洲地方（いずれも愛媛県内）に行ったりしたことに始まる。しかしこれは少年時代の旅であり、本格的な旅は明治十六年、十六才にして学問のために、一人東京に出てからのことである。子規は旅の期間を除けば、以後の生涯の大半を東京で暮らしながらも、自分が四国出身の人間だという意識があり、心の奥底に旅人だという意識があったものと思われる。それは「われかどで浮世の旅の首途（かどで）して（＝この世に生を受けて）よりここに二十五年、南海の故郷（＝四国を「南海道」という）をさまよひ出でしよりここに十年」（「旅の旅の旅」）などという一節にも伺うことができる。人生は旅であるが、自分も「故郷をさまよひ」出た旅人だというのである。江戸時代の人々が、封建的・閉鎖的な藩の内に生きなければならなかったのに対して、故郷を離れて東京で学ぶのが多くの近代エリートの生き方であったが、子規もその先駆けであった。東京で暮らす子規の心の中には、近代文学樹立をめざそうとする使命感もあったはずである。

本稿で主題とする「はて知らずの記」以前に、子規がどんな紀行文を書いているのか、どんな地方へ、どの位の旅をしているのか、その大要をまとめてみると次のようになる。

①「水戸紀行」―常盤会寄宿舎の友人吉田匡と徒歩で水戸へ。明治二十二年四月三日から同七日まで。半年後に紀行文としてまとめる。（四日間）

②「水戸紀行裏四日大盡（だいじん）」―大磯に療養中の大谷是空を見舞い、帰省するまで。明治二十二年十一月二十一日から二十四日まで。（五日間）

③「しゃくられの記」

（上）編―三並良、小川尚義と新橋を発ち三津の港（愛媛県）に着くまで。明治二十三年七月一日から九日まで。（帰省の途上）（九日間）

（中）編―藤野古白らと久万山へ。同八月十八日から二十一日まで。（松山に帰省中）（四日間）

（下）編―神戸・大阪・大津・義仲寺・石山寺・三井寺などの名所旧蹟を訪ねつつ東京へ。同八月二十六日から九月六日まで。（上京の途上）（十二日間）

④「かくれみの」―成田・安泊・七浦など房総へ。明治二十四年三月二十五日から四月一日まで。（八日間）

⑤「かけはしの記」―軽井沢・川中島などを経て木曽へ。明治二十五年五月二十七日から六月四日まで、六回に渡って「日本」新聞（以下「日本」と記する）に連載。（実際に旅をしたのは明治二十四年六月二十五日から七月四日まで十日間のことで、「脳病が悪くなった」ため学年試験を放棄して帰省する途上での旅である）

⑥「旅の旅の旅」―大磯の旅館を発ち箱根、芦の湖、修善寺、軽井沢、熱海などを経て大磯に戻る。明治二十五年十月十三日から十六日まで四日間。同十月三十一日から十一月六日まで、四回にわたって「日本」に連載。

この他に比較的短い紀行文として、次のようなものがある。

「山路の秋」（明治二十四年九月五日）

「大磯の月見」（「日本」明治二十五年十月十日）

「大磯に引網を見る記」（明治二十五年十月）

「第六回文科大学遠足会の記」（明治二十五年十一月）

「日光の紅葉」（「日本」明治二十五年十一月十一日）

「高尾紀行」（「日本」明治二十五年十二月十四日）

「鎌倉一見の記」（「日本」明治二十六年四月五日）

こうしてみると、書生時代の子規の旅は、東京を拠点としてその近郊と、故郷の松山と東京の間の旅に集中していることがわかる。これは経済力がないから、遠方までの自由な旅はできなかったためである。旅行の時期も、春休みや夏休みを利用することが多く、帰省あるいは上京の途上を旅として利用している。又、友人と同行の旅が多く、書いたものも友人達の回覧に供され、その評・感想が書き込まれている。

明治二十五年七月、子規は文科大学の学年試験に落第して退学を決意、同年十二月「日本」新聞社に入社し、書生から責任ある社会人―新聞記者へと大きな転換を迎える。子規の文学活動の基本はこの「日本」新聞、その文芸欄担当の記者としての活動に他ならなかった。以後の、子規の俳句や短歌の革新運動を始め、数々の名随筆は、「日本」を舞台として展開されたものである。その最初の作品が「かけはしの記」である。

「かけはしの記」について蒲池文雄氏は、次のように記している。

「この旅行そのものは明治二十四年六月であって、『かくれみの』の旅からわずか二箇月後である。しかし、こ

れを題材とした紀行文はその質において格段の向上を見せた。いってみれば『水戸紀行』から『かくれみの』までの作は習作であり、『かけはしの記』を以て本格的な紀行文が始まると言ってよかろう。それは『かけはしの記』の発表が約一年後になされ、その間、材料を暖めたり、文章を推敲する余裕があったことにもよるであろう。また、初めて天下の公器ともいうべき新聞『日本』へ寄稿するという緊張感が作品の質を高めたということもあったであろう。文中の俳句も、従来の紀行文中の即興的、遊戯的な句はかげを潜め本格的なものになっている。」（講談社子規全集第十三巻「解題」）

聞くべき意見である。ただ後述するように、子規の俳句や散文には当初ほどではないにしても「即興的・遊戯的な」気分がなくなったわけではなかった。

二　「はて知らずの記」の概略

「はて知らずの記」は、明治二十六年七月十九日、上野を発ち、八月二十日上野に着くまで一ヶ月にわたる子規の生涯の中で最も大きな旅行であり、初めての東北への旅だった。「日本」に連載されたのは同年七月二十三日から九月十日まで、計二十一回に及んでおり、旅先からその原稿を書き送り続けた。旅と紀行文を書くことは、同時並行的に進行し、しかもそれはただちに発表されたことになる。その記事は、明治二十八年九月五日発行の「増補再版獺祭書屋俳話」所収の「はて知らずの記」と幾分異なっており、多くの場合、当初「日本」に発表されたものの一部が削除されている。（旅の実態を探るには、双方を読んだ方がいいと思われるので、以下の解説は初出の「日本」の記事も紹介していくことにする）

「はて知らずの記」のコースは次の通りである。

上野駅発・宇都宮（七月十九日）―白河（二十日）―須賀川・郡山（二十一日）―本宮（二十二日）―二本松・黒塚（二十三日）―福島（二十四日）―飯坂温泉（二十五日）―桑折・岩沼・仙台（二十七日）―松島（二十九日）―仙台（三十日）―作並温泉（八月五日）―大石田（七日）―鳥川（八日）―酒田（九日）―吹浦・大須郷（十日）―塩越・本庄（十一日）―道川（十二日）―秋田・八郎潟（十四日）―大曲（十五日）―六郷・湯田（十六日）―黒沢尻（十七日）―水沢（十九日）―上野（二十日）

蒲地文雄氏の「解題」によれば「この旅行はのちの従軍の場合を別として、期間・行程ともに子規一生の最大の規模のもので、作品そのものも最長編となったが、事前に右のような準備（＝子規は旅に出る前に「奥の細道」を書写したり、白河関や松島の句を集めたりしたばかりでなく、武蔵・上野・下野・盤城など十一ケ国の人口、耕地、産物、仏寺、所得税などの統計表を記している）をしていること、特に文学面だけでなく人文地理的な研究までしていることにもその奥羽旅行にかける熱意のなみなみでないことがうかがわれる」と指摘している。

交通手段としては東北本線は汽車を利用したが、あとは徒歩で、時折、人力車を利用した。後で述べるように風雅を求めての旅は、徒歩でなくてはならないというのが子規の信念だったから、病弱な体に鞭打って歩くことも多かった。この時の旅装はいつもの旅のような草履（わらじ）脚絆ではなく、裾を引く袴に、おろしたての駒下駄をはいての旅だった。子規自らこれを「紳士旅行」と呼んでいるが、正装である。それは、「小生此度の旅行は地方俳諧師の内を訪ねて旅路のうさをはらす覚悟にて東京宗匠之紹介を受け」（明治二十六年七月二十一日河東秉五郎宛）と旅先からの書簡に記している通り、この旅によってみちのくの風光に触れるだけでなく、紹介状を持って各地方の宗匠を訪問しようと考えていたから、旅装では失礼だと考えたためである。

ここでいう「東京宗匠」とは具体的には、旧派の宗匠である三森幹雄、島本青宜を指す。明治二十六年一月から九月にかけて記された漢文の句日記「獺祭書屋日記」には、子規は「七月五日、出社、訪幹雄氏　涼しさやはせを も神にまつられて」（＝「はせを」は芭蕉）とある。新聞社に行った後、幹雄に会って、芭蕉にならってみちのくの旅に出かけたいと語ったのであろう。翌七月六日の記事には「出社訪青宜氏」とあり、「昔話団扇の風にかをりけり」と詠んでいる。団扇を仰ぎながら昔話―芭蕉の話に花を咲かせた、そこには風雅の香も漂っていた、と句はいう。子規はこの二人に熱烈な芭蕉賛嘆の思いを語り、みちのくの旅への憧れを語ったに違いない。

幹雄からは紹介状を書いてもらって、東北の俳人達との交流を深めようとした。その紹介状は、表紙に「添書正岡常規持」とあり、次のような内容になっていた。

「添書　　正岡常規

獺祭書屋主人

俳号　子規

右友人正岡氏土用休暇中祖翁細道之跡を尋ね殊に地方視察之為游杖致候間（＝杖をついて旅をいたしておりますので）御逢之節ハ宜敷御風交被下成て（＝おつきあいになって）特文学上之事ニ付御問答之度ハ無遠慮御尋可被成候（＝遠慮なくお尋ねになって下さい）何事ニても本会へ之用事も御相談被下候て不苦候間（＝本会への用事も御相談下さってかまいませんので）為念添書仕候　匆々頓着

三森三木雄（＝幹雄）

磐城国

岩代国

陸前国
陸中国
陸奥国
羽前国
吟路書大家　御中」

子規はこの添書を持参しながら各地の宗匠に会ったわけだが、結果は期待はずれだったらしい。先程の書簡に続けて次のように記している。

「（小生此度の旅行は地方俳諧師の内を尋ねて旅路のうさをはらす覚悟にて東京宗匠之紹介を受け―前述）已に今日迄に二人おとづれ候へとも実以て恐入ったる次第にて何とも申様なく前途茫々最早宗匠訪問をやめんかとも存候程に御座候　俳諧の話しても到底聞き分ける事も出来ぬ故つまり何の話もなくありふれた新聞咄どこにても同じ事らしく其癖小生の若きを見て大に軽蔑しある人は是非幹雄門へはいれと申候故少々不平に存候処他の奴は頭から取りあはぬ様子も相見え申候　まだ此後、どんなやつにあふかもしれずと恐怖之至に候　此熱いのに御行儀に坐りて頭ばかり下げてゐなければならぬといふも面白からぬ事に候　せめてこれらの人々に内藤翁（＝内藤鳴雪。子規よりも二十歳年上ながら、子規に俳句を学ぶ）の熱心の百分の一をわけてやり度候」

二人の宗匠は高齢者で、年若い子規を頭から馬鹿にしてかかったようだ。おそらく「日本」新聞も読んでおらず、子規の名さえわからなかったのかもしれない。俳句革新の野心に燃える子規の心など全く解せず、その文学的教養も貧弱で、文字通り「旧派」さながらの、どうしようもない人だと、子規には映った。子規は便宜として幹雄の紹介状を持ちこそすれ、烈々たる闘志と自立心をもち、マンネリズムに陥っていた旧派俳句打倒の意気に燃えていた

のだから（後述）「幹雄門へ入れ」など何をか言はん、の心境であったろう。宗匠と会って文学的交友を深めたいとの願いは早々とその出鼻をくじかれたようだ。

三　旅立の心

宗匠との交友を深める、ということも旅の目的であったとはいえ、これが第一の目的だったわけではない。子規が東北地方への旅を志した真の動機は、どのようなものだったろうか。冒頭の一節から、その旅立の心を探ってみよう。「はて知らずの記」の序を次に引く。

「松島の風象潟の雨いつしか（＝早く）とは思ひながら病める身の行脚道中覚束なく（＝心配で）うたた寝の夢はあらぬ山河の面影うつつにのみ現はれて（＝うたた寝の夢に、まだ見もやらぬ山河が夢うつつの面影となって現われて）今日としも思ひ立つ日のなくて過ぎにしを今年明治二十六年（＝「日本」の初出では、単に「今年」となっている）夏のはじめ何の心にかありけん（＝一体どんな気持ちからであったろうか）

松島の心に近き袷かな

と自ら口すさみたる（＝自づと口をついて出た）こそ我ながらあやしうも思ひしか（＝不思議なことだと思っていたが）つひにこの遊歴とはなりけらし。先づ松島とは志しながら行くては何処にか向はん。ままよ浮世のうき旅に行く手の定まりたるもの幾人かある。山あれば足あり金あれば車あり。脚力尽くる時山更に好し財布軽き時却て羽が生えて仙人になるまじきものにもあらず。自ら知らぬ行末を楽みにはて知らずの日記をつくる気楽さを誰に語らんとつぶやけば罔両（＝目に見えぬ物の怪）傍に在りてうなづく。乃ち以って序と為す。あなかしこ」（＝ああ、

恐れ多い、の意で手紙の文末に用いた挨拶言葉）

風に吹かれつゝ、松島の風光を眺めてみたい。雨に煙る象潟をこの目でじかに眺めてみたい。まだ見もやらぬ山河が心中で幻となって現れ、子規を駆り立ててやまなかった。「松島の風」や「象潟の雨」への憧れ—それはいうまでもなく芭蕉の「奥の細道」に触発されたものに他ならない。「奥の細道」には直接「松島の風」という記述はないが「江上に帰りて宿を求むれば窓をひらき二階を作りて、風雲の中に旅寝するこそあやしきまで妙なる心地はせらるれ」とあり、その風が感じとられる一節がある。また「江山水陸の風光、数を尽して今象潟に方寸を責む。酒田の湊より東北の方、山を越え、磯を伝ひ、いさごをふみて、其際十里、日影ややかたぶくころ、汐風真砂を吹き上げ、雨朦朧として島海の山かくる」とあり、ここで「象潟や雨に西施がねぶの花」と詠んでいる。松島と象潟—それは「奥の細道」で「松島は笑ふがごとく象潟はつらむがごとし」と対比されてもいる。瀬戸内の穏やかな海を見て育った子規は、表日本と裏日本の二つの海、その風光を眺めてみたかったのである。

「松島の心に近き袷かな」—袷は「合せ衣」の意で、昔、冬は綿入れを着、夏になるとその綿を抜いたものを綿抜きと称して着用した。この綿抜を袷といい、更衣で初めて着る初袷はそのすがすがしい清涼感が好まれ、人々は軽くなった身に、夏の訪れを感じとった。紀行文最初のこの句は、夏になって涼しい袷を着ると、松島で風に吹かれているような心地がする、という意味であろう。心はすでに松島に飛んでいるのである。

子規の心の中には、松島や象潟の風光に対する憧れがあり、特に松島に魅かれての旅立ちであったが、それでは松島・象潟を見るだけが目的であったかというと、そうではなかった。「まづ松島とは志しながら行くては何処にか向はん」というように、そして「自ら知らぬ行末」と記すように、半ばは行方定めぬ漂泊の旅を子規は志した。

しかし、この漂泊という言い方は少し注が必要なようだ。漂泊—それは文字通りには、漂ってはとどまり、とど

まってはまた漂うことであり、めざすべき方向も、意志も捨ててさまようことである。確かに、旅ということには一般的にいって、何か実用的な用件があっての旅でさえ、住み慣れた家、人々、自然から離れることであるから、漂泊の感情が伴うものである。だがそれは旅において味わう感情であって、その感情自体が目的ではない。しかし、子規の旅心は芭蕉と同じように—というより、芭蕉の影響のもとに「漂泊の思ひやまず」といった、旅に出ること、さすらうこと、それ自体を目的としていた。すでに「Baseo as a Poet（詩人としての芭蕉）」の中で「彼は自然を愛する心をみたすため諸国行脚を止めることができなかった。彼は第二の西行と名乗って日本を東西に旅した」（元は英文で帝国大学国文科二年、明治二十五年六月に書いたと推定されている）と書いていた子規である。子規の脳裏にあったのは、芭蕉を慕う心、自然を愛する心であり、自らの脚をもって日本の風土・伝統をさぐっていこうとする情熱だった。漂泊はその点で決して消極的な、受け身の、なされるがままに漂うことでなく、強い意志、伝統的な風雅の世界に己れを賭けて生きる決断のもとになされたものであった。

子規をみちのくへの旅に誘ったものとして、ここで取り上げた松島・象潟は、その一例として出したに過ぎないとも言えた。現に「日本」には「行くては何処にか向はん」に続いて、次のような一節が記されていた。

「金華山の豪壮高館の悲惨末の松山末遠くとも矢立峠に筆を濡(うるお)し西湖の遠きを忍びて名にしあふ秋田の蕗の哀はれを知らんかはた山形米沢をうしろにして越の国に夏の白雪を誰やらの膚にながめ猶ほ行く先は直江津より信州に入りて仏の御光を拝まんか山路にあへぎて掬(むす)びあへぬ清水越に渇せる喉(のど)をうるほさんか」

子規は、後にこの部分を削除したが、実際に旅に出ようとする時の子規の心には、みちのくから越後、信州へまで脚を延ばそうとする壮大な、胸躍るような旅への憧れがあったに違いない。

それにしても子規の旅に向かう心は楽天的である。ここには「奥の細道」の「古人も多く旅に死せるあり。予も

いづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず」といった、物狂おしいまでの、切羽つまった、真剣な思いはない。芭蕉の旅に求心的、求道的な悲壮感があるのに対して、子規の旅には、拡散的、享楽的な楽観がある。「病める身の行脚道中覚束なく」と不安はありながら、それにも増して旅への夢がふくらみ気分も浮かれていた。松島・象潟・金華山・高館…直江津・信州と次々に夢を語った後で、子規はその行く先はどこに向かおうか—どこでもいいのだ。「ままよ浮世のうき旅に行く手の定まりたるもの幾人かある」—どこへ行こうとままよ、浮かれて過ごすこの人生の浮かれ旅、面白おかしくその日その日の旅を楽しめばいいのであって、行く先の定まっている人など誰あろうか、という。

「浮世」という言葉は、もともと仏教的な厭世観を反映して、はかなく辛いことの多い人生、世の中という意味で「憂き世」と書かれていたものである。しかし、それが江戸時代になって現実的・享楽的な近世人の意識を反映して「浮き世」—面白おかしく楽しく過ごすべきこの世、人生という意味に変化した。「浮き世話」と言えば世間話、特に好色めいた話をさしたり、「浮き世狂ひ」と言えば女狂い、遊興に身をもちくずすことをいった。又「浮世の旅」とは、この人生を渡る、この世を生きることを旅に喩えていったもので、面白おかしく楽しい人生という意味である。

子規はこうした伝統を踏まえて「浮世のうき旅」と記しているが、その意識として「浮き旅」であったに違いない。それは生活という現実からはなれた風雅の世界への「浮かれ旅」である。浮かれるとはいっても、近世人の多くが金を頼りに酒や女に浮かれたのと違って、子規には金もたいしたなければ、女性への関心も乏しかった。ただ自然への愛着と文芸への愛着が一つになって、一所不住の思いに子規を駆りたてた。

人生は旅であり、旅に生きることこそ、その人生の本質に叶った生き方なのだ、というのが芭蕉の哲学であった。

子規はその芭蕉を慕って旅に出たが、その心は旅に出る夢と期待にふくらみ浮かれ出している。病弱ではあったが子規は若かった。その若さとは反面、無謀さということでもあった。

子規は旅立ちの序で、半ば冗談・戯れのように、山があったらこの足で上がっていけばいい、金があったらその金で人力車を雇えばいい、脚力が尽きたらそこで休めば山も一層風流だろうし、金がなかったら身も軽くなるわけだから、羽が生えて仙人のように空を飛べないわけでもあるまい。そんな気楽なはて知らずの紀行を書く楽しさを誰に語ろうか、と一人つぶやくと、傍らの心なき罔両までなるほどその通りと同感の意を示してくれた、という。ここでは旅の楽しみは二重に働いている。即ち「はて知らずの旅」をするその自由な漂泊の心―旅の解放感と、その旅について俳句を交えながら紀行の日記を書く楽しさと。

以上、「はて知らずの記」の序によって、子規の旅立ちの心を推しはかってみた。まとめていえば、子規は「奥の細道」の刺激を受け、松島や象潟をはじめ越後・信州へと漂泊の旅に憧れ、心は旅する楽しみ、それを書く楽しみに浮かれ出していた、ということである。

しかし、みちのくへの旅の動機はこのことに尽きるのでない。子規のこれ迄の歩みの中で、この旅立ちを考える時、この旅のもつあらたな意義も感じられてくる。それは子規における当代の「詩人」としての使命感、自負にかかわる問題である。

後述(「『はて知らずの記』における病い」の項)するように、子規は明治二十五年、小説家になることを断念、「詩人」―子規の定義によると花鳥風月を友とする人である―たらんとしていた。もともと好きであった俳句熱はこれによって一層燃え上がった。俳句の数も飛躍的に増えると同時に、古典俳句の研究に没頭し、これを「獺祭書屋俳話」として「日本」新聞に連載した(明治二十五年六月十六日から十月二十日まで)。その中の一つ「俳句の

前途」（七月二十五日）に次のようにいう。

「和歌も俳句も正に其死期に近づきつつある者なり。試みに見よ。古往今来吟詠せし所の幾万の和歌俳句は一見其面目を異にするが如しといへども細かに之を観広く之を比ぶれば其類似せる者真に幾何ぞや（＝本当に、どれ程多いことか）。弟子は師より脱化し来り後輩は先哲より剽竊（＝剽窃。他人の作品を盗み、自分のものと見せかけること）し去りて作為せる者比々皆是なり（＝どれもこれも、皆この類である）。其中に就きて石を化して玉と為すの工夫ある者は之を巧とし糞土の土よりうぢ虫を掴み来る者は之れを拙とするのみ。終に一箇の新観念を提起するものなし」

子規がここにいうように、和歌・俳句が「死期に近づきつつある」つまり「新観念を提起するものなし」という理由は、それが字音わずかに二、三十にすぎないからその「錯列法」―言葉の組み合わせには自ずから限りがあって、いずれ大同小異のマンネリ化に陥ると見たからである。子規はこの後に続けて「俳句は已に盡きたりと思ふなり。よし未た盡きずとするも明治年間に盡きんこと期して待つべきなり」とさえ記している。誠に過激なセンセーショナルな言葉である。

しかし、ここで注意しなくてはならないのは、これは俳句への絶交状ではなかったということである。俳句は死にかけている、すでに死んでいると断罪する一方、子規はそうした俳句の革新のために身を乗り出していく。それは子規一人の創作においてだけでなく、理論をもって日本の俳句界を導いていこうとする指導者意識と結びついていた。理論と創作は子規にあっては常に結びついていた。短歌においてもその通りで、子規はどちらかと言えば理論先行型の詩人であった。「獺祭書屋俳話」の連載に続いて、子規は明治二十六年二月三日、「日本」新聞の文苑欄に俳句欄を設ける。これがマンネリズムに陥った旧派俳句に対する新派俳句運動の発端となり、やがて新派の俳

句は全国に広がっていった。子規の俳句革新の精神はまさに一つの「運動」として展開していくのである。その最盛期は明治二十九年といわれるが、「日本」新聞を拠点とする子規の文学活動の中で「はて知らずの記」を考える時、子規のこの旅は、たとえ一人の旅とは言え、日本の俳句界を導くリーダーたらんとする闘志にうながされていたと言える。「はて知らずの記」の中に、そのことを吐露する力強い、興味深い一節がある。

子規はこの日、松島に来て観瀾亭から雄島五大堂をはじめ、大小様々の美しい島々を眺め、深い感動を覚える。この観瀾亭は豊太閤が伏見桃山に築いた建山を貞山公（政宗）に賜ったものだということを紹介した後で、次のように記す。

「嗚呼太閤貞山共に天下の豪傑にして松島は扶桑（＝日本）第一の好景なり。而して其人此亭中に此景勝を賞するに及ばず。此景此亭に其人を容れしむる能はざりしは千古の遺憾と謂はまくのみ（＝この素晴らしい景色、建物の中に太閤、貞山二人の豪傑を入れることができないのは、永遠に残念なことだといわざるをえない）。然れども風光依然として天下に冠たる限りは涼風萬斛（＝はかり知ることができない位、多い）夏を忘るゝ頃名明月一輪秋正に半なるの時、両公の幽魂手を握って此處に遊観彷徨するや必せり（＝中秋の明月のかかる時、太閤、貞山二人の魂は手をとって現れ、この美しい風光を眺め、さまように違いない）吾一介の窮措大（＝貧乏な書生・学者）固より槊を横へて（＝矛を横にかまえて）千軍（＝大軍）萬馬を走らするの勇無く手を拱して（＝こまねいて）一州一郡を治むるの能無しと雖も其意気昂然たる處に於て豈敢て人に譲らんや（＝どうして太閤、貞山に劣ろうか）。況んや風月の権に至ては大明を驚かし羅馬を瞞するの手段を以て猶且つ之を一書生の手より奪ふべからざるをや（＝詩歌についての権威に至っては、神を驚かし、ローマを欺くほどの手段を以てしても、なおそれを書生から奪うことはできないのだから、なおさらのことだ）。独り亭前に踞して（＝うずくまって）左顧右眄（＝左右を見ま

わす）すれば両公彷彿として座間に微笑するを見る。而して傍人固より知らざるなり。

なき人を相手に語る涼みかな」

「なき人」―二人の天下の英雄、秀吉や政宗の姿に己れを重ねつつ、子規は当代の風雅の世界に生きる矜持と闘志を語っている。子規の胸中には、俳句革新運動によって天下を席巻しようとする野心がうずいていた。その意味で、みちのくの旅は決して己れ一人の孤独な旅でもなかったし、享楽的な浮かれ旅でもなかった。孤独とも見えるその旅に「一軍の総帥」としての自負があったのである。

四　岩手の旅

象潟・八郎潟を経て子規が岩手を旅したのは、八月十六日から十九日にかけてである。子規は岩手で何を見、どのようなことを感じたのだろうか。その全文を四つに分けて解説してみよう。

①「十六日六郷より岩手への新道を辿る。あやしき伏家（ふせや）（＝粗末な屋根の低い家）にやうやう（＝やっと）午餉（ひるげ）し たためて山を登ること一里余樵夫歌（あまりしょうふの）（＝木こりの歌）馬の嘶（いなな）き遥かの麓になりて巓に達す。神宮寺大曲りを中にして一望の平野眼の下にあり。山腹に沿ふて行くに四方山高く谷深くして一軒の藁屋だに見えず。処々に数百の牛のむれをちらして二人三人の牛飼を見るは夕日も傾くにいづくに帰るらんと覚束なし。路傍覆盆子（いちご）林を成す。赤き実は珠を連ねたらんやうなり。急ぎ山を下るに茂樹天を掩（おお）ふて鳥声聞かず。下り下りてはるかの山もとに二三の茅屋（ぼうおく）を認む。そを力にいそげども曲りに曲りし山路はたやすくそこに出づべくもあらず。

蜩（ひぐらし）や夕日の里は見えながら」

六郷から岩手への道は、まだ開通したばかりの新しい道である。粗末な家で昼食をとり山に登る。麓からきこりの山唄や、馬のいななく声が聞こえる。頂上からは神宮寺、大曲が眼下におさめられる。なお「日本」新聞には「平野眼の下にあり」の次に「蜻蜓(とんぼう)を相手にのぼる峠かな」の句が載せられている。道行く人とてない細々とした山道を、群れ飛ぶ蜻蜓に囲まれるようにして登っていく子規の様子が浮かぶようである。

峠に着いて道は下りとなる。山腹に沿って下っていくが、山高く、谷深く、一軒の藁屋も見えない。麓には牛の群れを追う二、三人の牛飼が見える。岩手を代表する民謡「南部牛追唄」には、道中の牛方の歌う唄と、放牧地での牛飼の唄があるといわれている。子規は牛飼ののどかな唄を耳にしたようだ。やがて夕日も傾き、どこに宿をとろうかと少し不安を覚える。ふと路の傍に目をやると野イチゴが珠を連ねたように沢山赤い実をつけている。「日本」新聞には「連ねたらんやうなり」の後に、「駄菓子売る処だになき此山中造化の賜(たまもの)（＝自然の与える恵み）は腹にこたへてうましうましと独りつぶやきぬ」とある。飢えを覚えていた子規は、野イチゴを夢中で頬ばった。思わず「うまい」とつぶやく程の美味だった。日も暮れることとて、急いで山を下っていくが、木が深く生い茂って天をおおい、鳥の鳴き声さえ聞こえない。不安を覚えて急ぎ足となる。下りに下っていくと、はるかの山のふもとに二、三軒の茅ぶき屋根の家が見える。それを目あてに足を速めるものの、曲がりくねってどこまでも続く山路ゆえ、なかなか里に出ない。「蜩や」の句は、蜩もしきりに鳴いて日も暮れようとしている、彼方に夕日を浴びた里は見えるものの、行けども行けどもその里に着かない、とその心細さを詠んだものである。

②「日くれはてて麓村に下る。宵月をたよりに心細くも猶一日里の道を辿りてとある小村に出でぬ。ここは湯田といふ温泉場なりけり。宿りをこへば家は普請に係り客は二階に満ちて宿し参らすべき処なし（＝お泊めできる部屋はありません）とことわる。強ひて請ふに台所の片隅に爐をかかへて畳二枚許り敷きわが一夜の旅枕とは定まりぬ。

建具ととのはねば鼾声三尺の外は（＝すぐ近くにいびきの声の聞こえるその外には）温泉に通ふ人音常に絶えず。

白露に家四五軒の小村かな

山の温泉や裸の上の天の河

肌寒み寝ぬよすがらや温泉の臭ひ

秋もはやうそ寒き夜の山風は障子なき窓を吹き透して我枕を襲ひ薄蒲團の縫目深く潜みて人を窺ひたる蚤の群は一時に飛び出でて我夢を破る。草臥の足を踏みのばして眠り未だ成らぬに（＝野宿にくたびれた足をのばしてまだ深く眠りにつかないでいるうちに）。」

子規が湯田に着いたのは、日もとっぷりと暮れ、月明りの照らすころだった。宿を求めたところ、今は改築中で、客は二階に満員状態となっており泊める所もない、と断られる。しかし、今更、宿を探し歩くわけにもいかないので、無理に頼み込む。台所の片隅に炉があり、その脇に畳を二枚敷いて泊まることとなった。改築中で建具も整っていないから、すぐ傍らからは客達のいびきが聞こえるし、外からは温泉に行く人の物音が絶えず聞こえて、眠られぬ一夜となった。「日本」新聞には、「絶えず」の次に「夕月の落ちて灯を吹く夜寒かな」の句が載せられている。こうして建具もととのわない部屋に泊って外を見やると、月も沈んで、夜寒の風がランプの灯に吹きつけている、というのである。

本文中の「白露に」の句は、白露も宿りそうなひえびえとする今宵、家四五軒ほどしかないこの小さな村はすっぽりと山々に囲まれ、一層寂しく感ぜられることだ、という意味。続く「山の温泉や」の句は、山々に囲まれた温泉につかり、旅の疲れをいやしている、湯から上がって裸のまましばし空を仰ぐと天の河があざやかに見える、という意味、最後の「肌寒み」の句は、山の夜寒の風に吹かれ肌寒いため眠ることのできぬこの一夜、温泉の臭いば

かりが鼻をぷんと刺激し続けることだ、という意味であろう。

「日本」新聞にはこの句に続いて「秋風や人あらはなる山の宿」の句が載せられている。山あいの温泉のことと て、秋風の吹く中を裸の人もあらわに見えている、という意味である。うそ寒い夜風が障子もない窓からつつ抜けに入ってくる。その上、蒲団布に潜んでいた蚤の群れがピョンピョン跳ねて飛び出し、浅い眠りの夢を破る。くたびれきった足を踏み伸ばして、存分に眠ることができないでいるのに、と嘆く。このあたりの記述は「奥の細道」の「蚤風馬の尿（しと）する枕もと」を思い出させるものがある。

③「十七日の朝は枕上の塒の中より声高く明けはじめぬ。半ば腕車の力を借りてひたすらに和賀川に従ふて下る。ここより杉名畑に至る六七里の間山迫りて河急に樹緑にして水青し。風光絶佳雅趣掬（きく）すべく（＝風流な趣きをくみとることができて）誠に近国無比の勝地なり。三里一直線の坦途（たんと）（＝平坦な道）を一走りに黒沢尻に達す。家々の檐端（えんたん）（＝ひさし。廂）には皆七夕竹を立つ。此日陰暦七月六日なり。」

台所に寝ていたため、朝早くから人の声に目を覚まされる。山あいの温泉の気分は満喫したものの、隣人のいびき、温泉に通う人の騒ぎ、うそ寒い夜風、薄蒲団、そして蚤、湯田の一夜は睡眠不足気味であった。人力車を雇ったのも旅の疲れが回復しなかったからであろう。

和賀川に沿って杉名畑に下る道は素晴らしい眺めだった。「はて知らずの記」の中でも、松島と、この和賀川に沿って黒沢尻に向かうコースほど、その風光を絶賛している箇所はない。松島は旅の最初に期待していたが、このコースの美しさは旅して初めて発見したものだった。（「ここより杉名畑」から「黒沢尻に達す」までの一節が、平成六年碑文として刻まれ、和賀町横川目石羽根ダム湖畔広場に建立された）なお、「日本」新聞には、「勝地なり」の後に「若（も）し三秋（＝秋の三ヶ月）已に暮れんとして紅葉花よりも紅なるの候に至らずば果たして如何ならん」と

いう一文が続いており、晩秋の紅葉の盛りの折に訪れたならどんなに美しいだろう、と今一度訪れてみたいと願ったことが偲ばれる。

しかし、こういう美しい自然に接した時は案外、句は生れぬものらしい。この絶佳を詠んだ句は一句も残されていない。言葉にならない—句として表現できないような感動だった。素晴らしい光景は名句を生むというわけではない。それに子規の句は多くの場合、風景や自然それだけを詠むというより、人間の姿と結びついていることが多い。人間的な温もりを通してでなければ自然を詠みにくかったということも背景にはあろう。

④「十八日旅宿に留まる。けふは七夕といふに風雨烈しく吹きすさみて天地惨憺（さんたん）たり（＝ひどくうす暗い）。十九日曇天。小雨折り折り来る。

秋の蝿二尺のうちを立ち去らず

午後の汽車にて水沢に赴く。当地公園は町の南端にあり。青森仙台間第一の公園なりとぞ。桜梅桃梨雑樹を栽う。夜汽車に乗りて東京に向ふ。

背に吹くや五十四郡の秋の風」

黒沢尻の宿では、これ迄の晴天が嘘のように、烈しい風雨が続く。おそらく台風であろう。終日、宿に閉じ込められて気もふさぐような思いであった。「日本」新聞には「天地惨憺たり」の下に、「雨うたて願ひの糸のきれやせん」「七夕の袖やかざさん初嵐」の二句が載せられている。「雨うたて」は、七夕というのにこの激しい雨はどうしたことか、本当にいやになってしまう、願い事を書いた短冊を吊るす糸もこの雨で切れてしまうのではないかと心配されることだ、という意味、次の「七夕の」は、七夕の晴着の袖をこの激しい風にさらそうか、という意味であろう。

また「小雨折り折り来る」の次には「はたごやにわれをなぶるか秋の蠅」が載せられている。句は雨に降りこめられて、こうして旅の宿にとどまっている自分をなぶるように、しつこく秋の蠅がつきまとっている。本当にうとましいことだ、というのであろう。「秋の蠅」の句も同じような趣旨の句であるから、子規は「はたごやに」の句の方を、後に削除したのである。これらの句には黒沢尻の旅館に雨に降りこめられて、無聊のうちに過ごしている子規の鬱屈した思いが感ぜられる。

黒沢尻から汽車に乗って水沢に赴く。青森・仙台間で第一の公園といわれている水沢公園を訪れるが、すでに帰心の募っている子規の筆はそっけない。「日本」新聞には「雑樹を栽う」の次に「駒形神社の祭礼なりとて商人の用意頻りなり」とある。祭りの準備で、のぼりも立てられ、露天の商いの準備でにぎわっていたのであろう。しかし、それはさほど興を引くものでもなかった。

水沢駅から夜汽車で東京へ向かう。汽車に乗るとみちのくの旅も、たちまちのうちに過去のものとして、背に感じられる。「背に吹くや」の句の「五十四郡」とは奥州を指す。鎌倉末から南北朝期にかけて奥羽五十四郡の通念が成立していた。句は、今、みちのくを後にして夜汽車に乗ろうとする自分の背を秋風が吹き、奥羽五十四郡の旅もたちまち過去のものになろうとしている、というのである。

「はて知らずの記」冒頭で「松島の風」に吹かれたいと願い、「松島の風に吹かれんひとへ物」と詠んだことと対応させるようにして「はて知らずの記」は、背に吹く秋風で終っている。一月のうちに季節は夏から秋に移り、気軽な戯作気分の漂っていたこの紀行文も、終わりの寂しさを告げようとしていた。

五　旅と病い

(1)「水戸紀行」「四日大盡」における病い

明治二十二年に書かれた「水戸紀行」の冒頭で、子規は次のように旅に対する少年時代からの強い愛着を物語っている。

「余は生れてより身体弱く外出は一切嫌ひに只部屋の内にのみ閉ぢこもり詩語粋金（＝詩。粋を集め、金を集めたような言葉の意か）などにかぢりつく方なりしが好奇心といふことは強く遠く遊びて未だ知らざるの山水を見るは未だ知らざるの書物を読むが如く面白く思ひしかば明治十四年十五の歳三並太田竹村三氏に岩屋行を勧められし時は遊志勃然として禁じ難くとても其足では年上の人に従ふことむつかしければと止め給ひし母上の言葉も聴き入れず草鞋（わらじ）がけいさましく出立せり」

「水戸紀行」はその題の示す通り、水戸地方に徒歩で学友の吉田匡（＝子規と同じ常磐会寄宿舎に暮らしていた）と共に旅した折の紀行であるが、これを書くにあたってそれ迄の旅――十五才の時の岩屋行、十六才の大洲地方への旅、東京に来てからの王子・鴻の台・小金井などへの散策や旅についてざっと述べている。過去の旅を総括的にしめ括るとは、新たな旅――紀行文の始まりでもある。簡単な旅行記はこれ以前にもあるが、子規の紀行文はこの「水戸紀行」に始まると言ってよい。

この一節をもって子規は、病弱にもかかわらず、旅が好きだったと、単純に片づけるわけにはいかない。。子規の文学的活動がそもそもその病いを抜きに考えられなかったように、子規の旅自体にも病いが色濃く反映している

のである。文中に「母上の言葉も聴き入れず」と記すように、人の言葉にあまり耳を貸さない一徹さ、それは「はて知らずの記」にも、そして後、従軍記者として大連に渡る時にも共通していた。子規がもし、病弱な体をいたわり、気遣って、おとなしく室内で養生をしていたとしたなら、あれ程の病苦をなめることはなかったろう。端的にいって結核を悪化させたのは、その無謀な旅のためであった。旅が病いの原因であり、その病いが、子規の人生と文学を大きく変えていくのである。

子規もこの点については気づいており、「水戸紀行自序」に次のように記している。

「ある人問ふ、何故に半年前の紀行をわざわざさかのぼりて書くやと　答へていふ　これには三ツの原因あり　第一は兼てよりこの紀行を書かんと思ひしかとも帰京後　病気抔(など)のためはたさざりしこと、第二、此旅行は帰京後一ケ月にして病気を引き起し其病気は余の一身に非常の変化を来し　大切の関係を有する者なれば其原因となるべき此紀行を書かんと思ひつきこと　第三は即ち最近因にして先日竹村錬卿(たんけい)の常総漫遊日記を読み自分も水戸紀行を書かんと急に思ひたちしこと也」

子規が水戸への旅に出たのは、明治二十二年四月三日から七日までのことで、その折の体験を十月十七日から二十日にかけて回想して記したのが「水戸紀行」である。なぜ半年も経ってから紀行文としてまとめたのか、それは旅から帰って病気のために書けないでいたからだという。そして、その病気は、子規の一身に「非常の変化を来し」たのだから「其原因となるべき」この紀行につき、どうしても書きたいと思ったというのである。

旅は当然の事ながら、肉体的な労苦を伴うし危険も多い。「若(も)しいつは災難にあふべし死ぬべしと分った日にはかりの浮世に何一つ面白かるべき」と考え、「神ならぬ身の一月さきの病を知るよしなければ」「勇み立ちて」出かけたのが水戸への旅であった。旅中「此船中の震慄が一ケ月の後に余に子規の名を与へんとは神ならぬ身の知る

よしもなければ」と記すように、後の「子規」―結核の予兆と思われる寒さに震えることもあった。子規は旅の一月後、苦労の報いのように病いに苦しんだ。即ち、五月九日の夜、寄宿舎で突然喀血、翌日再び喀血、山崎元修医師の診察を受け、肺病と診断されたのである。夜十一時頃、再び喀血し、一時頃までの間に「時鳥」の題で「卯の花をめがけてきたか時鳥」「卯の花の散るまでなくか子規」など四、五十句を作り、それが「子規」という雅号の誕生につながっていった。旅は「子規」という病いを生きる文学者を生む要因となったと言えるのである。

子規はこの「水戸紀行」を書いた後、十一月二十一日から二十三日まで、新橋発の汽車で大磯に行き、人力車で松林館に静養中の大谷是空を見舞った。大谷是空は第一高等中学校の友人で、明治二十年ごろから盛んに行き来し、二人の間には「お百度参り」と題する愉快な往復書簡のやりとりもある。是空はしばしばノイローゼ気味であったらしく、子規は戯れて「脳病子是空」と呼んだりしている。この時も是空は「脳病」のため大磯に療養していたが、退屈なため子規を招いたのである。

子規は是空と共に過ごした大磯での出来事を「水戸紀行裏四日大盡」という題にまとめた。標題は大磯行きを、水戸紀行と対比させた上で水戸紀行の、いわば「裏」だという。なぜ二つの紀行が表と裏の関係になるのか。それは水戸行きは、健康であった時の労苦をなめた旅であるのに対し、大磯行きは病気のさ中にありながら楽しい旅だったからである。(「四日大盡」の文字通りの意味は四日間にわたって「大盡」のように贅沢三昧を尽くしたという意味である。「大盡」とは江戸時代の言葉で、遊廓などで大金を使いつくして遊ぶ大金持ちの放蕩家である)即ち、「四日大盡」のはしがきには「陰陽盛衰は浮世にはのがれたがたき道理にや昨日の公卿は今日の庶人、今日の乞食は明日の大盡、げに定めがたき浮世かな、吾、此春常州(=茨城、水戸)に遊び今また思ひたちて相州(=神奈川、大磯)に遊ぶ。前には身体すこやかなれど後には病の器なり、すこやかにして難難をなめ、病ありて快楽を得たり、

かるが故に水戸紀行は失望と落膽を以て満ち、四日大盡は得意と快楽とを以てをはりぬ…水戸紀行と四日大盡と合せ見ば人事ここに備はらん矣」とある。二つの作品は江戸戯作の影響を受けた遊戯的、戯作的な作品といってよく、著者名が「水戸紀行」は「莞爾先生子規」、「四日大盡」は「秋の幽霊、子規子」とあるのも、戯作的な気分を漂わせている。

その遊戯的な気分のうちにも子規は二つのことをはっきりと書いている。第一に健康であった時の旅の無理が「子規病」(「四日大盡」で初めて使った子規の造語で結核のこと)の原因であったということ、第二に、病気ゆえに養生の旅を存分に楽しめた、ということである。病気のお陰で楽しめたという発想には、いかにも負け惜しみの強がりを示す子規のユーモアが伺われる。

「水戸紀行」(とその裏たる「水戸紀行裏四日大盡」を含めてもよい)を子規の紀行文の処女作であるとすれば、「はて知らずの記」はその完成と言える。前者は書生仲間の回覧に供され、友人との楽しい旅で、文中に駄洒落をちりばめた会話が多く記されているのに対し、「はて知らずの記」は(その土地土地の人々との出会いはあったにしても、基本的には)ただ一人の、一月にも及ぶ、孤独な、沈潜していく旅であり、「日本」新聞によって広く全国の読者に対して書かれた作品である。そしていずれの作品にあっても、病いの影響を見落すことができないのである。

(2)「はて知らずの記」における病い

子規は「はて知らずの記」の旅に出かける前年の明治二十五年、小説「月の都」を執筆したものの、かんばしい評価が得られなかったことから「僕ハ小説家トナルヲ欲セズ詩人トナランコトヲ欲ス」(同年五月四日虚子宛書簡)でいうように、小説家を断念、詩人たらんと決意していた。詩人とは「人間よりハ花鳥風月がすき也」(五月二十

八日碧梧桐宛書簡）という人である。花鳥風月が好きで部屋の中に閉じこもっていられるわけがない。又、多くの人間に囲まれた都での生活に安住できるわけはない。詩人たらんとすることは、旅に生きる決意でもあったはずである。同年「獺祭書屋俳話」によって、俳句革新運動を展開していた子規は、「かけはしの記」（五月二十七日から六月四日まで）「旅の旅の旅」（十月三十一日から十一月六日まで）などの連載俳句紀行をはじめ「日光の紅葉」（十一月十一日）「高尾紀行」（十二月十四日）などの紀行文をものして「日本」新聞に発表している。すでに述べたように、翌二十六年二月からは同紙に俳句欄を新設し、これが「日本」派普及の緒となった。子規の心の中には、単に己一人の風雅の世界を求めようということばかりでなく、世の詩人達を導いていこうとする意識があった。当然のことながらこうした東京近郊の小さな旅でなく大きな旅をして、多くの句や文章をものしたいと思っていたに違いない。それが「奥の細道」にならって、みちのくへの旅に出かけたいという思いを募らせた。

しかし、病弱な子規は、思い立ったからといってすぐ旅に出かけるわけにはいかなかった。「はて知らずの記」冒頭近くに次のような一節がある。

「三春病ひに鎖して筆硯やうやうにうとみ勝なるに六月のはじめつかたより又わらはやみに罹りて人情の冷熱一生の盛衰は獨り心に入みながら時鳥の黒燒其の効あらず野道の女郎花（おみなえし）われ落ちにきと人に語ふ間も無く木末の朽葉ふるひかへしふるひ落して兎角する程に一月も過ぎぬ。」

「三春」とは三年間、あるいは春の三ヶ月をいうが、ここでは二・三・四の春三ヶ月を指していると思われる。「獺祭書屋日記」によってこのころ（明治二十六年春）の子規の生活を確かめてみると、血痰・発熱あり、病床に臥している日が多いことに驚かされる。医師の宮本仲の来診も受けている。これは二十二才の時発病の結核によるものであるが、四月には数日の間、不眠症にも悩んでいる。病床に臥しているため「筆硯」と遠ざかりがちであっ

たというのは、自由に外を出歩き、自然との交流を深められなかった、ということも意味しているのであろう。

もちろん、病いのために旅も不可能だった。五月になって容態も安定したかと思いきや、六月初めには発熱・頭痛・寒気に襲われる。医師を招いて診てもらうと、「瘧（おこり）」という診断だった。瘧というのは決まった時間をおいて発熱を繰り返す病気で、多くはマラリヤを指す。古典では多く「わらはやみ」と記されており、子規もこの言葉を使った。熱さと寒さの繰り返しの中で、人情の温かさ、冷たさ、人間一生の栄えと衰えを感じつつと、諧謔を弄した筆はさらに冗談とも暗い予感とも思われるような記述へと移っていく。即ち、ほととぎすの黒焼を食べてもその効き目もなく、野道に咲くおみなえしの花も私は散ってしまったと人に告げる間もなく、木末の朽葉もひるがえり、はらりと散り、あれこれしているうちに一月も経過した—これはほととぎすの病（結核）が治らなかったこと、そして女郎花や朽葉が散っていくように、自分の死を予期した（夢に見た）というのであろうか、解しがたい一節ではあるが、瘧や結核に苦しんだということをいっていると思われる。これに続いて鉄眼禅師の見舞いを受けたことが記される。

「ある日鐵眼禪師のわが病牀をおとづれて今より北海道行脚にと志すなりと語るるに羨ましさは限りなけれども羽抜鳥の雲井（＝空）を慕ふ心地して

涼しさやわれは禪師を夢に見ん

と餞別の一句をまゐらす（＝差し上げる）」

鉄眼禅師—放浪の歌人、天田愚庵が子規の病床を訪れたことも、子規の旅心を一層促した。空を飛ぶこともできない羽抜鳥が空を慕うように、旅に出る愚庵をねたましく思いながら子規は彼を見送る。病床に臥しても涼しい風に夏の訪れが感じとられます。この風に吹かれながらせめてはあなたの姿を夢に見ることにしましょう—ねたまし

さを覚えつつもそんな餞別の一句を送る。

「やがて病の大方におこたりしかば枕上の蓑笠を睨みて空しく心を苦しめんよりは奥山羽水を踏み越えて胸中の鬱気を散ぜんには如かじと我も思ひ人も勧むるままに旅衣の破れをつくろひ蕉翁の奥の細道を寫しなどあらましと、のへて今日やたゝん明日や行かんと思ふものからゆくり無く（＝思いがけず）醫師にいさめられて七月もはや十九日といふにやうやう東都の假住居を立ち出でぬ。」

日記に「瘧落ちて足ふみのばす蚊帳哉」とあるように、幸いなことにして瘧も回復したので、旅装の蓑笠を眺めて旅に出たいなどと思っているより奥羽の山河を旅して胸中のもやもやとする思いを発散させた方がよいと思い、又人も勧めるので、旅の着物の破れをつくろい—これは「奥の細道」の「もも引の破れをつづり」の影響であろう。実際には羽織・袴に下駄ばきだったのだから—「奥の細道」を書き写していよいよ旅にと思っている矢先に、思いがけなくも医師にいさめられる。健康を第一に考えるような人なら、つい一月、二月前の病状、結核や、瘧に苦しめられたことを考えて、旅に出ることなど自制するところであろう。しかし、子規は病気のことよりも、旅心にせかされていた。七月十七日の日記には「旅立の事ばかりいふあつさ哉」とある。七月十八日の虚子宛書簡に「小生松島行の計画有之候処医師にとめられ今日迄遷延候故中心落付ず苦居候ひしに漸（ようやく）許を得て明日出発一箇月位漫遊之積（つもり）に御坐候也　旅心せき候まま大略御免被下度候」と記しているのでわかるように、おそらく医師の許可も不承不承のものだったに違いない。わずか二日前の書簡には「小生松島行を企て居候へども医師にとめられて未だ発足せず心は矢竹（やたけ）（＝弥猛。いよいよ勇み立つさま）にはやり申候」と書いているのだから。

子規のみちのくへの旅は時間的にも、距離的にもこれ迄にない大旅行—現代でさえ一月かけての旅行というのはあまりないことだろう。子規は最初から一月程を予定していた—であったが、自ら「半紳士半行脚の覚悟故気楽」

（七月二十一日碧梧桐宛書簡）と記すように、半分は行脚―徒歩であるが半分は紳士―蒸汽機関車や人力車という文明の利器を利用しての旅だからと気楽に考えていたのである。すでに「山あれば足あり金あれば車あり」と序に記していたように「足」と「車」があれば大丈夫だ、という楽観が子規にはあった。その実「足」を支える体力も、「車」を利用する金もたいしてなかったのである。旅先で金が不足して「日本」の社長陸羯南に送金を依頼したり、金がないため疲れきった体で無理に歩かねばならなかったことも、旅先からの書簡に記されている。おそらく節約のため徒歩にせざるをえなかったこともあったろうし、芭蕉の頃よりは便利になっているとはいえ、交通の不便だった当時の東北への旅である、どうしても歩かざるをえないことも多かったはずである。しかし、子規はそんな泣き言を「はて知らずの記」には書いてはいない。

「足」と「車」のどちらが大切か―旅の始まったころの子規は意気揚々と次のようなことを書いている。

「まことや鉄道の線は地皮を縫ひ電信の網は空中に張るの今日椎の葉の葉草の枕は空しく旅路の枕詞に残りて和歌の嘘とはなりけり。されば行く者悲まず送る者歎かず、旅人は羨まれて留まる者は自ら恨む。奥羽北越の遠きは昔の書にいひふるして今は近きたとへにや取らん。

みちのくへ涼みに行くや下駄はいて　など戯る」

「日本」に七月二十七日発表された記事の一節で、内容としては七月十九日、瓢亭に上野停車場で送られたことを記したあとに続く記述である。「家にあれば笥（け）に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」（万葉集巻一四二）と万葉の昔から読まれた草枕とか椎の葉は野宿の旅から生まれ旅の枕詞となった言葉である。しかし、文明開化の鉄道や電信の時代となって空しい枕詞として残るだけとなった。旅もかつての徒歩、野宿の旅のような苦労はなく、奥羽北陸は今となっては近い所にすぎない。だから旅立つ者もかつてのように悲しむこともない。見送る者も嘆く

こととてない。それどころか、旅出つ人はねたましくさえ思われ、旅に出ることの出来ない者はくやしく残念に思うばかりだ—これはまさに現代の快適で便利な旅にともなう人々の気持ちそのものである。

「みちのくへ涼みに行くや下駄はいて」の句には、みちのくへの遠い旅であるにもかかわらず、これを気軽なものと受け止めている安易さ、楽しさがあるが、それは鉄道という利器のもたらしたものでもあった。そして、文字通りに行脚むきの草鞋ではなく、下駄をはき袴を身につけて汽車の人となったのである。

上野を発って子規は宇都宮で知人のもとに一泊、再び汽車の人となり那須野、白河と進んでいく、白河での子規の感慨を次に引く。

「車勢稍緩(ややゆる)く山を上るにこのあたりこそ白河の関なりけめと独り思ふものから（＝一人思ったが）山々の青葉風涼しくして更に紅葉すべきけしきもあらず（＝一向に紅葉しそうな気配もない）。能因はまだ窓の穴に首さし出す頃なるをきのふ都をたちてけふ此處を越ゆるも思へば汽車は風流の罪人なり　汽車見る見る山をのぼるや青嵐」

ここには能因法師の「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関」という有名な歌がふまえられている。能因法師は春霞のたつころ都を発ちここ白河についたころは秋風が吹いていたというが、自分は昨日都を発ったばかり、紅葉どころか青葉風が涼しく汽車の窓から入ってくる。「汽車見る見る」の句には、もうもうと蒸気を上げて力強く進む汽車が青嵐とマッチしてこの巨大な文明の利器の躍動感が詠み込まれている。それは近代の新しい詩情の発見にまでつながっていくものであろうが、伝統的な風雅の心に生きている子規にとっては「汽車は風流の罪人なり」と断罪せざるをえない。汽車は便利ではあるが、自分の旅は「風流」を求めての詩人の旅である。いざとなったら汽車に乗ればいいという楽観はあったものの、子規は一方で汽車に抵抗していた。文明が詩心を奪うと考えていたようだ。旅に出てわずか二日目、七月二十一日付の碧梧桐宛書簡に「半紳士半行脚の覚悟故気楽なれども

面白き事はなく第一名句は一句とても出来ぬに困り候　小生は今日に於て左の一語を明言致し申候　名句は菅笠ヲ被リ草鞋ヲ着ケテ生ルルモノナリ」と記し、気楽な汽車の旅ではなく徒歩行脚の旅こそ名句を生む条件だと発見したのである。汽車の停まる駅を中心として旅するのでなく、こまめに歩いていこうと考え始める。歩いてみてはじめて芭蕉が体験できる。子規はそう実感した。

「とにかくに二百余年の昔芭蕉翁のさまよひしあと慕ひ行けばいづこか名所故跡ならざらん。其の足は此の道を踏みけん其目は此の景をもながめけんと思ふさへただ其の代の事のみ忍ばれて俤（おもかげ）は眼の前に彷彿たり。

その人の足あとふめば風薫る」

旅立ちの準備として「奥の細道」を書写したこと、芭蕉をこれまで読み続けてきたこと、そうした体験が今、行脚する子規の心と体を通し血肉となって生きてきた。ここには芭蕉追懐の情が美しく描かれている。子規を歩かせたのは芭蕉だったとも言えよう。

だが、その徒歩の旅こそ、子規を苦しめたものだった。芭蕉が「奥の細道」の旅に出たのは四十六才、子規は二十六才、だが、「奥の細道」の中に疲労困憊する芭蕉の姿はほとんど見ることができない。痔を病んでいたといわれるが三ヶ月にもわたる徒歩旅行を続けて風雅の誠を求め続けた芭蕉は、相当な健脚、肺活量の持主ではなかったかと思われる。これに対し二十六才の子規は青年とはいえ、結核で肺活量も少なく、体力に恵まれなかった。「はて知らずの記」をみると、所々に気の毒な子規の姿が伺われる。たとえば、七月二十五日、荵摺（しのぶずり）の石を見て、福島・飯阪温泉に至る一節に次のようにある。

「帰路殆ど炎熱に堪へず。福島より人力（＝人力車）を驅りて飯阪温泉に赴く。天稍（しょうしょう）々曇りて野風衣を吹く。涼極って冷。肌膚粟（きふあわ）を生ず」

みちのくの真夏の暑さ、そして今度は寒さ、一日のうちの厳しい気候の変化に子規は苦しんでいる。

「二十八日晴。天漸(ようや)く熱し。病の疲れにや旅路の草臥れにや朝とも昼とも夜ともいはずひたすらに睡魔に襲はれて唯うとうとと許りに枕一つがこよなき友どちなり」

病いと旅の疲れに眠りをむさぼる子規はまだ松島にも着いていなかった。

八月七日楯岡での記述。

「七日晴れて熱し。殊に前日の疲れ全く直らねば歩行困難を感ず」

若い時の疲れは、一晩休めば翌日までもち込すことはあまりない。しかし子規は疲れた体をひきずるようにし、足をふらつかせながら旅を続けたのである。

八月十一日塩越から象潟にかけての記述。

「十一日塩越村を経。象潟は昔の姿にあらず。塩越の松はいかがしたりけんいたづらに過ぎて善くも究めず。金浦平澤を後にして徒歩に堪へねばしばし路傍の社殿を假りて眠る。覚めて又行くに今は苦しさに息をきらして木陰のみ恋はし喘(あえ)ぎ喘ぎ撫し子の上に倒れけり」

「はて知らずの記」冒頭に「松島の風象潟の雨いつしか」と記した憧れの地、象潟は、姿は昔とは変わってしまっていたとはいえ、何も記されていないのは、むしろその疲れのためではなかったろうか。疲労のため歩けず社殿を借りて眠り、目覚めて又歩くも息を切らしともすれば木陰で休みたくなる。息苦しさに喘いでは撫子の上に倒れてしまった、という句は、決して誇張でも虚構でもなく、結核をわずらって旅する身の苦痛の表現であろう。

なお、この句は旅先から漱石に宛てた手紙の中にも記されている。その手紙には「愚生（＝僕は）財政困難のため真成之行脚と出掛候処炎天熱地の間にむし殺されんづ（＝むし殺されそうな）勢にて大に辟易(へきえき)し此頃ハ別仕立の

人車追ひ通しに御坐候　風流ハ足のいたきもの紳士ハ尻のいたきものに御坐候」とあり、次にこの句が記されている。金がないため行脚をせざるをえず、暑さにひどく悩まされている。そこで今は人力車を利用しているがこれは尻が痛い。徒歩だと足が痛い。どちらにしても苦しいものだとユーモア交じりに書いている。

八月十一日の夕方、子規は本庄に着き、遊廓を見る。

「稍々二更（＝およそ午後九時から十一時）近き頃本庄に着けば町の入口青楼軒をならべて幾百の顔色ありたけの媚を呈したるも飢渇と疲労になやみて余念なき我には唯臭骸のゐならびたる心地して格子をのぞく若人の胸の内ひたすらにうとまし

骸骨とわれには見えて秋の風」

子規とて二十六才の青年である。しかし、飢えと疲れに悩む彼にとって、なまめかしい廓の女達も腐臭を放つ骸骨にしか見えなかった。これに続く一節。

「くたびれし足やうやうに引きづりてとある旅店に宿を請ふに空室なしとて断りぬ。三軒四軒尋ねありく（＝歩く）に皆同じ。ありたけの宿屋を行きて終に宿るべき処もなし。蓋し此夜は当地に何がし党の親睦会ありて四方の田舎人つどひ来れるなり。古雪川を渡りて石脇に行きここかしこと宿を請ふに一人の客面倒なればにや（＝たった一人の客は面倒だったのだろう）盡く許さず。詮方なく本庄に帰り警察署を煩はしてむさくろしき一軒の宿籠屋により飯などたうべし時は三更にも近かりなん」

「はて知らずの記」の中で、この八月十一日が最も苦しい日だった。大須郷を立ち、塩越、象潟を経て疲れきって本庄にたどりついたものの、旅館では宿泊を断られ、仕方なしに石脇に行き宿を求めたがここでも断られ、再び本庄に戻り警察署を煩わして、やっと宿を見つけてもらった。「三更」―今の午後十一頃から午前一時頃まで―真

夜中になってやっと宿について眠ることができたのだった。

病いと疲労に悩みつつ旅する子規の姿は、外から見ても気の毒な病人と見えたらしい。まだ旅が始まって間もない頃、七月二十七日、桑折（福島県）に人力車で向かう途中、葛の松原での記述に次のようにある。

「故ありてここの（＝葛の松原）の掛茶屋に一時間許り休らひたり。野面より吹き来る風寒うして病躯堪え難きに余りの顔の色あしかりしかば、茶屋の婆々殿にいたはられなどす。強ひて病に非ずとあらがへば、側に在りし嫁のほほ笑みて都の人は色の白きに我等は土地の百姓のみ見慣れたれば斯く煩ひ給へるにやと覚ゆるもよしなしや（＝こんなふうに心配なさったのでしょうかと思われるにつけてどうも仕方のないことです）など取りなしたる。むくつけき田舎なまりも中々に（＝かえって）興あり」

茶屋の老婆は子規の青白い顔を見て、病人だと思っていたわってくれた。その嫁は都の人は皆色白なのに、あなたを病人扱いして、かえって失礼しましたと詫びる。子規はその訛りに興味を覚えると同時に、みちのくの人情に触れた思いであったろう。

このようにして苦労をなめながらも芭蕉を友として、みちのくの名所、旧跡を見て歩くこと一ヶ月。二十一回に及んだ紀行の最後を子規は次のようにしめ括った。

「始めよりはてしらずの記と題す。必ずしも海に入り天に上るの覚期にも非らず。三十日の旅路恙なく八郎潟を果として帰る目あては終に東都の一草庵をはなれず。人生は固よりはてしらずなる世の中にはてしらずの記を作りて今は其はてを告ぐ。はてありとて喜ぶべきにもあらず。はてしらずとて悲むべきにもあらず。無窮時（＝永遠の時間）の間に暫らく我一生を限り我一生の間に暫らく此一紀行を限り冠らすに（＝題するに）はてしらずの名を以てす。はてしらずの記ここに尽きたりとも誰れか我旅の果を知る者あらんや。

秋風や旅の浮世のはてしらず

「はて知らずの記」とは題しても、当然のことながら、文字通り無窮の海に入り空に上ろうという覚悟があったわけでもない。浮かれ出すようにして楽しい夢想のうちに出発したこの三十日に及ぶ旅も、しばしば病いと疲労に倒れつつも無事に終り、八郎潟を北限として、やはり帰るのは、東京のわが草庵—根岸の借家である。子規が「草庵」と我が家を呼ぶのは、芭蕉庵をはじめ、古典の詩人達の住んだ粗末な草の庵という意識からである。子規は生活者としては東京根岸に母・妹と暮らす「日本」新聞社員である。文芸欄担当とはいえ、社員としての勤務もある。しかし、そうした実際的なことを書いたのでは文学としての紀行にならない。仕事とか家庭、それは俗の世界に属することである。旅はあくまで風雅の世界に遊ぶことであり、紀行文は風雅なるものとして完結しなくてはならない。考えてみれば、人生という、はて知れぬ旅—死という永遠にたどりつくまでの一生はまさに旅に他ならない—の中にあり、旅路の果てとして今、我が家に戻っただけのことであって、人生は本質的には旅であり、自分は旅人なのだから帰るべき我が家があり、旅が終わったからといって喜ぶべきでもない。自らの安堵感を抑えるようにして子規はそういう。しかし同時に、人生を果て知らぬ旅と考え、はかなく空しいものとしていたずらに悲しむべきでもあるまいともいう。いたずらな感傷、無常観は子規には縁遠いものだった。にもかかわらず、子規にも夢を遂げた後の一種、空ろな思いもあったと思われる。この旅によって、己れの弱い体を改めて感じさせられもしたであろう。あるいは、己れの生のさ程長くないこと、自分が「旅人」であることを改めて実感することにもなったかもしれない。初夏の涼しい風は秋風に変わっていた。その秋風が一層、そうしたわびしさ、虚しさを募らせもした。「旅の浮世のはてしらず」と幾分の享楽的な気分をとどめながらも、旅立ちの心境と比べれば、「浮かれた心」も消え失せて寂しく、沈潜する思いがここにはある。

〈参考文献〉

子規全集　第十三巻　小説・紀行　講談社刊